「舞姫」が私たちに教えていること

１．はじめに

私は「舞姫」を勉強していて、今と明治とでは時代背景が異なるため、人の考え方も今とはずいぶん違うんだと感じた。

この作品を読むには、時代背景を理解しておかないと読んだ後、感じ方も変わるだろうと思う。

それなのになぜ、今でも読み継がれ、授業で学ぶのか。その答えは、今でもこの作品から何か学びとる必要があるからだと思い、「舞姫」が私たちに教えていることは何なのか考えてみた。

そして私の最終的な結論は、人は何かを得ようとすると、何か他のものを失ってしまうというような、人生はそんなに簡単ではないというものだ。

2．本論

私はこのテーマを以下の二点から結論を出した。

(ア)豊太郎という人物より

豊太郎は秀才で、なまけず学問に励み、気を緩めることなく勤務をし、受動的で機械的な人物であった。

官長や母からすれば、とても聞き分けがよく、使いやすい人物だったに違いない。

しかし、その人物像は、決断力がなく、臆病で優柔不断な本当の豊太郎自身をごまかし、誰かが自分のために作ってくれた道をただ歩んできた結果からできあがったものにすぎない。

豊太郎という人物は自分の意志を表さず、自分を押し込めることで周りから評価を受けていたのだ。

ドイツに来てからは、自由を得たと感じ、本来の自分で生活すると、職をなくしてしまったり、周りの留学生からは中傷されたりと散々である。

そして、本文にもあるように、豊太郎は自分の大事なものをなくすまいと思うと、友に対しては「いや」と言えない性格をもち、大事なものをなくすくらいなら、自分の意志に関わらず、行動してしまう。

このように、豊太郎は自分を犠牲にすることで、評価や仕事、そして友という存在を得ていて、何かを得るには自分までもを失ってしまう人物である。

(イ)時代背景より

社会が大きく変動した明治時代には、自分の能力によって上の階級へのし上がることが可能になった。
そして、学んだことによって身をたてることは人間として、価値ある行為とされていたため、豊太郎は厳格な家庭教育を受け、父を早くに失ったために、学業により励み、母の期待を一身に受けていた。
本文にあるように、留学したのは、名を挙げて出世するのも、家名を上げるのも、チャンスだと思ったからだ。
明治時代では、立身出世が士族の子弟達にとって大きな夢であったように、豊太郎にとっても大きな目標であったのだろう。
豊太郎はドイツへ行き、日本と違う環境におかれ、自由を感じ、エリスと付き合うことで学業が荒み、出世から離れてしまった。
しかし、相沢という出世した友と会うことでまた出世の道を意識し始めたのだと思う。
立身出世の道とエリスとでとても迷うが、この時代の日本を考えると、立身出世を選び、エリスを失うことが当然なのだ。
もし明治時代に豊太郎が生まれず、立身出世に価値をそれほどもたない今の時代に生まれたなら、舞姫の結末も変わっていたかもしれない。
このように、豊太郎はエリスと仕事を同時に手に入れることはなく、明治の立身出世という価値に飲み込まれ、自由を得ずに出世の道をただ歩むといった、機械的人間に戻ってしまっている。

3.結論

豊太郎は立身出世の道とエリス、この二つを同時に手に入れることはなかった。
厳しい家庭教育を受け、立身出世を目指すため、自分自身を縛ってまで、まわりの人が作った道をただ歩んできた豊太郎は、ドイツへ行き、自由を感じ、エリスを手にいれ、豊太郎自身が作った道を歩もうとしたが、まわりからの評価は下がり、出世への道から離れてしまった。
そして、相沢の助けで再び立身出世への道を歩もうとする時、評価を下げないようにするため、エリスと別れる必要があり、目標のためにエリスを失った。
このように、豊太郎はエリスを得ると仕事を失い、仕事を得るとエリスを失うというように何かを得ようとすると、他の何かを失ってしまい、豊太郎は縛られているものから自由になろうとすると排除され、自由になったと思ったら再び縛られてしまっている。
以上より、鴎外は「舞姫」という作品から人は何かを得ようとすると他の何かを失い、自分の思いどおりにならないことばかりで、人生はそんなに簡単ではないと私たちに教えているのだ。